

〈資料紹介〉 翻刻『潤色江戸紫』(上)

翻刻の会

- 一、底本には関西大学図書館の七行九十九丁本を用いた。
 - 二、底本を忠実に翻刻することを原則としたが、次のような校訂方針に拠った。
 - 1 本文は文字譜を手掛かりにして、適宜改行を施した。ただし、道行・景事の類、会話の途中等では改行しなかった。
 - 2 各丁の表・裏の終わりは、丁数の数字とオ・ウの略号を()で示した。
 - 3 仮名は現行の字体に統一した。ただし、感動詞、送り仮名、捨て仮名の類以外の、本文中の「ニ」「ハ」「ミ」は「に」「は」「み」とした。
 - 4 漢字は、一部の異体字を除いては、原則として通行の字体に統一した。
 - 5 漢字・仮名ともに、誤字、脱字、当て字、仮名遣い、清濁は底本の通りとした。
 - 6 特殊な略体、草体、合字等は現行の表記に改めた。
 - 7 豊字は、平仮名は「ヽ」、片仮名は「ヾ」、漢字は「々」に統一した。ただし、「く」はそのまま残した。
 - 8 文字譜の類はすべて採用し、本文の右傍の適切と思われる位置に翻字した。
 - 三、本文の翻刻は、次に掲げる翻刻の会(学部学生の研究会)の会員によってなされた。

芦野陽子、浦野洋紀、太田楓実、釜丸祥、小林芙美、酒瀬川なおみ、柴田紘孝、中村梨恵子、西有幸、日當真心、布施あかり、水田千尋、横山知尋、吉村仁志。
- 節付、改行及び本文の最終確認は山田和人が担当した。

(山田和人)

備考

本書は『世話浄瑠璃大全』(精華書院、一九〇七)に所収されているが、翻字の誤りを修正し、節付も補い、改めて底本に忠実な翻刻本文を提供できるようにしたことを断っておきたい。

潤色江戸紫

作者為永太郎兵衛

翻刻の会

序いせ物語よみくせむすめ
むかし。娘ありけり。思はざる難にあひ。東の都の。町の住居をはなれ。菩提所にかりに居にけり。其寺にいとなまめいたる。小姓の有けるを。かいま見て心地まどひしより。逸早みやびをなんしける。色香も深き恋草のヲロシへ浮名ぞ世々の。形見なる。比は天和の始の年。二月下の五日。天満宮の御未流。都五松宰相（一オ）殿の御本所には。けふ御神事とて賑しく。未明より北野の聖廟へ御社参あれば。北の御方お手廻りの。女中を相手に琴を弾じ。吹物の声澄渡り管弦も。既に事終れば。思ひくりに詩をつくり。和歌を手向の神いさめ。有難くも又なまめかし。折ふし次より。取次のあなにつれ。お家の雑掌。安森源次兵衛が妻の名代とて。三十余りにいやしげなき。女房盛の片かうがい。袍姿しとやかに。臆する色も長書院。御目通りに手をつかへ。憚りながら。私は（一ウ）きそと申て。源次兵衛が駁吉三郎かうば。主人が妻は長々の病気ゆへ。名代の御機嫌窺ひ。いつくの廿五日より取分けて日和もよく。お目出たい御祭礼。御前様にも嘸御満足でござりませふと。入ル事計さつはりと詞少に述けるは。吉三郎を育たる。うばが器量ぞ奥床し。北の御方御機嫌殊に艶しく。兼て源次兵衛の妻の願ひには。四十二の二つ子なれば。出家させんと幼少より。東へ遣し置いたる。一子吉三郎を呼戻し。家をつがせ度との願イゆへ。我カ夫マ宰相殿。則今日北野の神前において。源次兵衛へ直キに其旨仰（二オ）付らるゝ筈。それに付是成ル女童は雛鶴とて。幼時より手廻りにて使イし者。吉三郎に娶よと我カ殿のおさしづと。世に頼もしき御シ仰。ハツア冥加に余る御シ計ひ。私が育た和子の身の出世と。うばが嬉しさ。雛鶴もおもはゆげに。ホンニまあ数ならぬ便りない此身を。稚ひ時より御養育。それさへ有ルに誰有ふ。源次兵衛様の嫁と成

は。かさねくの御厚恩と悦ぶ事は限なし。北のかた重て。雛鶴といふ名を。今よりお雛と改て。吉三郎に云号するからは。何かはきそが世話ならん。よきに頼ムと有ければ。ア、何が扱君より給はる花嫁御。おひな様の身の上は此うばに。(2ウ) お任せなされて下さりませ。立帰つて此よし申さは病人も無悦び。長居は恐レとお乳の人。御前シを立ていそくとやかたにへこそは帰りける。

時しも北野の社より。主人に先達子下向する。五松家の両家老。安森源次兵衛稻垣平太。社參の礼服おごそかに。御前間近く畏る。北のかた見やり給ひ。両人が先だつての下向気づかはし。我カ夫マのお帰りは。何ゆへ遅きと尋給へは。源二兵衛。謹で。イヤ我君には。神事の義式相済ムと。直クに參内遊したるによつて我々御ン先キへ。罷帰る其子細は。是成平太に急の御用仰付られ。今日俄に江戸表へ出立。ヲ、其義は兼(3オ)て我カ夫マのお願ひ。江戸湯島天神の宝物。松竹梅の一軸は。当家の御先祖。菅丞相の御ン筆なれば。拝見なされ度キと有て。五条高辻五松。東坊条唐橋と。其家々は分かれ共。皆菅原の御家門。一統しての奏聞にて。今日勅許有けるか。ハ、いかにも。此平太に彼松竹梅の一軸を。受取參れとの仰。殊に彼地は源次兵衛の故郷。吉祥院と申ス。菩提所に罷り有ル吉三郎を。よき序なれば召連レ帰れとのおさしづ。源次兵衛は跡より発足。致さる、筈也と申上れば。ヲ、御先祖天満宮の縁日にあたつて。御家門のお願ひ勅許有し折から。源次兵衛(3ウ)の願ひも叶へは無悦び。扱又是成ル雛鶴を。吉三郎に娶よとの仰なれば。伴ふて東に下りや。彼ノ地には戸倉十内とて。吉三郎が母方のおぢも有と聞ク。直に婚礼取結ば、媒は稻垣平太。其旨とくと心得よと。重き仰にハ、ア冥加至極と源次兵衛。頭を疊に摺付れば。

産^{地色ウ}付いたる平太^{ハル}が苦口^{にがくち}。拙者^{せつしや}は公用^{こうよう}なれば先^{しめ}キへ出立^{しゅつたつ}仕る。源次兵衛殿^{げんじべゑどの}は内用^{ないよう}の事なれば。勝手次第^{かてしだい}に立召^{たてまわ}れ。七八ヶ年
も寺^{てら}に育^{そだつ}た。吉三郎^{きちざうらう}が清進腹^{しやうじんはら}へ。雛鶴^{ひなかり}の生鳥^{なまどり}をみやげに遣^やさるゝとは。何^{なに}から何迄^{なにごと}お気の付^ついたお上^{かみ}ミのおさしづ。併^{しかし}い
また妻^{つま}をもぐせざる此平太^{このへい}。媒^{なかつと}してもくるしかる(4才)まいかな。ハテ何^{なに}が扱^{あつか}。其義^{そのぎ}はちつ共御遠慮^{ともおんえんりよ}ない事と。互^{たひ}いの
挨拶^{あいさつ}雛鶴^{ひなかり}も会^あ積^あして。吉三様^{きちざうさま}は聞^き及^{およ}ぶ御器量^{おんきりりやう}よし。見ぬ恋^{けん}にあこがれし望^{のぞ}ミは叶^{かな}ふて嬉^{うれ}しけれど。御所^{おんじよ}に育^{そだつ}たといふは
名計^{なけい}りで不調法^{ふてうほう}な私^{わが}。ホ、其案^{そのあん}じは道理^{道理}く。媒^{なかつと}の拙者^{せつしや}なれば。とくと聞^きたいはこなたの親本^{おんほん}ト。此^{この}お家^{いへ}へお出入^{でいりだ}の。呉服^{こふく}
所の娘^{むすめ}よなど。問^とれて雛^{ひな}は顔赤^{かほあか}らめ。返事^{へんじ}なければ北^{きた}のかた。ヲ、今迄^{いま}は深く包^ひしが。あ^あの雛^{ひな}には父^{ちち}もなく母^{はは}もなく。十
六年^{じゅうろくにん}以前^{いぜん}歳末^{さいまつ}の御神事^{おんかみじ}に。宰相殿^{さいざうどの}北野詣^{きたのよみ}の帰^{かへ}るさ。七本松^{ななぼんまつ}の辺^へに。赤子^{あかこ}の泣^なク声^{こゑ}せしを。乗物^{のりもの}のみすの隙^{ひま}より見給^{みたま}へは。
早咲^{はやさき}の梅^{うめ}を。一本^{いっぽん}(4ウ)添^{そへ}たる女の捨子^{すてこ}。誠^{まこと}や当^{あた}家の御先祖^{おんせんぞ}菅丞^{かんせう}相^{さう}には。父^{ちち}母^{はは}もましまさず。是^ぜ善公^{ぜんこう}の庭前^{ていぜん}の梅^{うめ}の本^{ほん}ト
に。天降^{あまくだり}給^{たま}ふと聞^き。其古例^{これい}を学^{まな}び。五松家^{ごしょうけ}へひらはれんと。梅^{うめ}の枝^{えだ}を添^{そへ}置^おし親^{おや}の心^{こゝろ}のかんばしく。仕丁^{しぢやう}共に云^い付^つて連^つ帰^{かへ}り。
両家老^{りやうけらう}のそち達^{たち}にも隠^{ひそ}し。密^{ひそ}かに出入^{でいりだ}の呉服所^{こふくじよ}を頼^{たの}み。八^{はち}つの年迄^{としごと}育^{そだ}させ。末^{すえ}の栄^{さか}を寿^{ことぶ}て。雛鶴^{ひなかり}と名^なを付^つ自^{みづか}が手廻^{てまわ}りへ
召^ま出し。娘^{むすめ}も同前^{どうぜん}に養育^{よういく}せし者^{もの}なれば。不^ふ便^{べん}をくはへてやつたものと。世^よに有^あ難^{がた}き御^{おん}物^{もの}語^ご。
ハ、ア適^{あた}成^なル嫁^{よめ}が系^{けい}図^ず。源次兵衛^{げんじべゑ}が身^みの満^み足^あ。そふ共^{とも}く。媒^{なかつと}いたす。拙者^{せつしや}も俱^{とも}に大慶^{たいけい}と詞^{ことば}を揃^{そろ}へ。お受^う申^ませは北^{きた}のかた。
平太^{へい}は急^{いそ}ぎ東^{あづま}マへ(5才)くだり。湯島^{ゆじま}の社^{やしろ}の宝^{たから}物^{もの}。松竹梅^{しょうちくばい}の一^{ひと}軸^{たく}を。首尾^{しゆび}よく受^う取^と帰^{かへ}浴^{よく}すべし。逗留^{たうりゅう}の間^まは小石川^{こいしがわ}の。
田^ゐ乗^{のり}寺^{でら}に旅宿^{りよしゆく}せよ。阿闍梨^{あじかり}は自^{みづか}が弟^{あに}なれば。心置^{こゝろ}キなく頼^{たの}べし。先^{まづ}々^ず源次兵衛^{げんじべゑ}は雛^{ひな}を屋^や形^{がた}へつれ帰^{かへ}れと。残^{のこ}る方^{かた}なき
御^{おん}恵^{めぐみ}おそれ敬^{うやま}ひ退^{たい}出^{しゅつ}する。

老をいたはる花嫁の姿はやさし姫小松。つれて東へ飛梅や。いろかをふくむ梅はちの。御門を出る。旅の空長閑き。春こそへ久しけれ。

花のお江戸に隠レなき。太田持資の草創有し湯島の社年ふりて。数の願ひを神樂所に立まふ。神子は当社の神職。柩采女が秘蔵娘。顔も姿もうつきりと名さへ小雪が恋ざかり。年は十八さ、げし鈴に(5ウ)神和らぎ。参詣よだれを車つかひや競組。其鈴爰へもかしこへも戴たがる悪クたい口。ヲットみこ殿跡が有ルと。お初穂ほふれば。次はおふくが入替り鈴戴て舞ければ。おふくはいやしや初の子殿御供を爰へ。アイと小雪がさし出すを我レよ人よとばい取勝。あたま勝なる若者共鳥居のかたへざゝめき行。コレ小雪様。せんど戸倉十内様のお出の時。おまへの色の三吉殿がお供してごんしてアノ松竹梅の絵馬を見て。本郷お七十一歳是をかく。扱も見事。手が美しけりや器量が思ひやらる、といふてで有た。あんな悪性な男共しらいで。お洗米つ、む杉原で日文かいてやらんしても。あつちには気がおほいとたき付られて。マアそ(6オ)りやほんかいのとうろくすれは。サアそれじや程に。都から下つてござんす稲垣平太様。おまへにほれて日外より。色々とくどかんすこそ幸。某女房にならしやんせ。ヲ、うるさいそんな事は聞キたふない。と、様シの碁の友達の内でも。中カのよい十内様。お供はいつでも三吉殿。ござる度にそふじやぞへ。かふじやぞへと念入して置クのに油断のならぬ。見へたらどうしてかうしてとりんきの稽古折こそあれ。入来る戸倉十内。りつぱに物づく当世侍。供はり、しき角前髪。小雪嬉しく。アレ十内様がお出なされた。と、様へ申てたもと二人を立せ。舞衣取て出向ひ。まあこなたへとあいくろし。

ヲ、今日は京都五松宰相殿のお使者。(6ウ) 稲垣平太と申仁。御用筋で来らる、筈。其義に付いて身も参つた。定て平太わせられたで有ふな。アイお出なされてまあ有ふ事か。聞カしやつて下さりませ。私を女房にくれいと。此間より爺様に色々と貰かけ。あたいやらしい事の有条不紊。又其上へ腹の立事聞て。エ、けふは又なぜ遅ひと。待た程に三吉殿。ア、是々。そりや何いはつしやる。お旦那のお出は御用筋。サアそりやしつて居る。逢つたら心一ぱいいはふと思ふた。じたいマアくくこな様シが。コレハくくやれきつい腹立。ナ二三吉。身に成かはつて。彼ノ心一盃いひたい事を聞てとらせ。小雪も咄せさ。イヤ平太采女が嘸待かね。罷通ると家来引連し入にける。(7オ) さつてもしたり。十内様は睥の水上。いたづらの水上とは是爰な性悪様シ。又沙汰なしにいぬまいぞとじつとしめたる手の中に。猶余り有ル恋路也。コレく旦那は睥なれど。かたくろしい御親父采女殿が。見付られたらやかましい。イ、エと、様シは此事をよふ知つて。末々はおまへとわしを。女夫にせふと思ふて居さしやんす最中へ。あの京の平太づらが横恋慕。たとへ死ナしやんしたか、様シの蘇へと、めさんしても。それはいやといひはつて済マさふが。心の済ぬはこな様シの胸の内。あの松竹梅の絵馬を見て。手が美しけりや器量もさぞと。あんまり誉て貰ふまい。いやじゃぞへ。おかんせと。むなぐら取てもそしらぬ顔。此(7ウ) 手がまめで油断がならぬとほつきりかまれて。アイタ、こりや迷惑。いふ事が有なら嘸ず共。吞込様にいふたがよい。手を誉たを恠気せふなら。此中両国橋で。占算がおれが手の筋を見て。ア、よいお手じや。しかし神子を女房に持つたらば。エ、其跡は何ンといふたへ。サア其跡は。女夫中睦じかるべし。そりやほんかへ。ヲ、嬉しとひつたり抱付く相思ひ。人目をとちよ恋風に乙女の姿しどけなく。

地色中
コレ三吉様さんまでたいひたい事もたんと有。あの神楽所かぐらじよへついちよつと。いやくも岩木いはきならねは打うとくる。神かみや首尾しゆびして逢あすらん。折おもこそあれ本郷ほんがう四丁目八百屋久兵衛。何か白木の掛物箱かけものばこたづさへて入来る中。（8才）娘お七は門前もんぜんより駕籠かごを折おしる。わかな染。だて紋はは封文ふうぶん。風流娘ふうりゆうむすめと名なに立たてて江戸紫の色なかふかし。コレお七。足あしが痛いたむならデエちともんでやろか。ヲ、勿体ちうたいない。と、様さまとした事が。かこに乘のてきたによつて。わたしは足あしはいたふないが。お前まへは嘸なお草臥くたびれ。イヤなふおらは上元じやうげんの生れ達者たつたにごござる。アレ見や久しう参らぬ内。神楽堂かぐらだうが建たたは。江戸中の絵書ゑかきが我わレと上あげた絵ゑま。此祇園ぎおんの火灯ひとほしは法橋ほつきやう吉庵きちあん。鐘馗しやうき大臣だいじんは狩野かの養卜やうぼく。長谷川はせがわ当春たうしゆんが朝比奈あその草摺引くすりびき。ひいき目めかしらぬがわわごりよのかいた松まつ竹梅しんげつ。天神様てんじんの真筆まなびを。手本てほんにした程ほど有あて。見事みごとく。イエ其時は天神様てんじんのおかげおかげで。（8ウ）ほんのあれはてんねん事。今はけつて手がふるふて。イヤくそれから五つ年としがいた物。上あるとて下さりやせぬ。ヤア娘ぢまんにかかつてほつとりと忘わした。此御神筆おんかみ采女殿さいにょに手渡てわりする迄までは氣きがせく。サアわたしも早あいまにたふござんす。コレハしたり。日頃しんぐ信心しんじんする天神様てんじんも拜おがままずにもふいにたいか。其様さまにお寺てらに居ゐ心こころがよふて。尼あまに共成ともなてくれな。アレ筑紫つくしの飛梅とびを継穂つぎほにした。御神木おんかみの花盛はなり。さあおじやいかふと寸すんの間も。傍そばをはなれぬ子こかはひがり連つれてへ本社ほんに詣まける。長い頭巾うきんはよよいいよよやささ。競き立た衆しゆのよよいいよよやささししるしででござざる。ハウエツプ。後のちの一い盃はちが過すきたなふ左衛門ざゑもん。ホンニ武兵衛大分ぶべゑ酒さけがああ（9才）ががつた。あの鉢はちも大坂おおさかの浮瀬うかむせにままけけややせせまい。イヤ。今いまちちららりと見みたは。貴様きさまの舅しゅうと八百屋やちやの久兵衛くべゑ。かかごごかららおおりりたはは慥しやう娘ぢやうのお七なな。ありやいつ女房にやぼうに持もつつぞい。銭金ぜにかね入いれながらお頭かかしききつつふ釣つれるの。サレバイヤイ。小判せうばんでつらはつて置おクくののに何なにンんのかかののといひ延のばばす久兵衛くべゑ。見付みづたが幸さいじや。ほほててののくくねねるる程ほどたたでで付つててここままささふ。ソレそれれくく本腰ほんこし

に成てもくわれと。大道一ぱいすじかいにのけぞりかへるぞにきてい也。イヤ太左衛門。あり様マは甲州屋へいて。ぶつか
けでもかき込んで待ていや。ヲ、そんならそふせふ。用が有ならちよつとしらしや。皆の者どら連れてこふ。何ンのいやい仰
山さふに。サア（9ウ）いけくと太左をいなせて待所へ。

久兵衛親子を送ッて出る禰宜与太夫小腰をかぐめ。おまへ方お出の様子見受ましたれ共。主人采女只今抛なき客来。コ
レハく御ていねいなお断り。扱手前へ預り置キました御神筆。松竹梅の一軸を持て参つて。神樂所に待ッて居ると。おつし
やつて下されと。云付かへす後より。コヲレく。鼻の先キに居る花聲になぜ挨拶さつしやれぬ。ホイ万屋の武兵衛殿天
神参りか。ア、皆の者どらがぶつかけ喰に行クが。こんかといふたによつて。コレくお七。めんようあの子はおれ見る
とあちらむくはい。胸わるくと聞てもらを。先ッ此武兵衛近年の出来分限。競組へも金かして（10オ）お頭くと用ら
れ。去年日陰町の類火の時分も。こな様ンの所へ皆の者どらかけ付さして。荷物を旦那寺の吉祥院へのけさしたも。皆此
鼻が金の威光じやノよいか。おうといはれ。それから振廻しがめてに見へるによつて。まあ是で家と蔵とを建さつしやれ
と。利銀なしに三百両渡して。もふ近い内本郷へ家移も成ルは。かふ肩入して世話するに。何が不足で嫁入は遅ひの。イヤ
おりや筋がわるいかいなあ。是比黒ひ目でいらんで居る。八百屋お七はお寺の小梅すいもあまいも喰た。小姓がしるといふ
歌がはやる。ア、是申。爰はでんど人も聞ッ。わたしが嫁入は新宅へ（10ウ）家移もしてから。ヤ家移りもしてから
べ、べ、べ。美しい顔であんまり積てくれな。サア久兵衛殿。かした金とろとはいはぬ。お七を今つれていぬ。イヤまあ
得心させて。金の訳も立た上で。ハテこつちへくるからは金の事はいはぬ。連れていぬるといやがるお七を無体。さ、ゆる

久兵衛つきのけはりのけ腕まくりしてせちがへは。後口地ウに始終しじゆうを立聞たつもんク三吉。こらへ兼て武兵衛が首筋引捆ひつつかんでどうど投なげ。小雪諸共親子をいたはる其内に起上おきあつて。コリヤ前髪まへがみめ。とつから出でさつてよふ尻餅しりもちをつかせたな。ヲ、サ。旦那の屋敷へお出入の八百屋久兵衛。何かはしらず難義の体見捨あいさがたく。挨拶に出たが何なにとした。ムウ。今の様に投なげケ（口オ）たのが挨拶か。イヤ手前は投なげぬけが有た。まあいはゞお身がよはいといふ物。イヤこいつがく。うぬを投なげけてけが有たと済ますぞよ。コレく籠相そざういはしやんすな。代官所のお役人。十内様地色ワの御家来中じやぞへ。ヲツト神子殿肩持かたましやんな。虱しらみと侍侍イこはがつては競組きやくみと口はきかれぬ。投なげケた返報へんぱうまつかうと腕振うでふり上あれは。われぶつかよ。小指こゆびの先さきでもさはるが最期さいご。其場はた、せぬ。さあぶてく。イヤぶたぬか。ソレ其腕は何なにの為ためじや。イヤ是は彼ノ舅殿八百屋殿。是ほんな自然薯じねんじよはなんぼしよな。ホウても替かつた物望ものぞろじやの。イヤ望は其お娘むすめ。コリヤ頬見知ほみちつたぞ前髪殿様。其内逢うちイましよおさらばと。まけぬ顔して立帰たる。

久兵衛地ハルははがみをなし。（口ウ）かへす金のあてもあれど。知る通りの不仕合。心に任せずいひたい事得こといはぬも娘が不便べんさ。何なにレもの手前めんで目めないとはらく涙なみだ。お七は悲かなしくわたしゆへに御苦勞おくろうかける。冥加みやがの程ほどが恐おそしいと。歎なげけは小雪三吉も。心こころをさつしいたはる所へ。

当社地中ウの神職しんしやく 榎采女えんさいにょ ゆうくと立出た。コレハく久兵衛殿。早速のお出祝しうしやく 着きに存ぞんます。ハア。あれへ呼よびはなされいで。扱あ彼ノ仰越おほこれた御神筆ごしんひつ 持もて参まつた。ソレハ御苦勞おくろう。京都五松殿御拝見ごはいけん なされたき使者ししやとして。稲垣平太いながきへいと申仁まねん先頃さきより逗留たうりう。社僧しやそうの喜見院きけんいんへも隠かくして。六年以前に其元へお預まけ申また様子。せんかたなくて打明うちあけたれば。遺まは京家の武士有あるまい事ことで

ない。其金子取替てくれふと（12才）の事。ハア。それは平太様とやら御奇特な事。其金も直ぐに御寄進といひたけれど。しらつしやる通り類火のあげく。ヤそれはそふよ。扱爰に一つの気毒は。此箱の鍵が日外から見へませぬ。ナンノ〜。ついで錠前は明キます。イヤ御両所へ此通り。申上て下されと三吉を追やつて。枡を結でから手水。小柄で箱のふたこじ明ケ。ヤアこりや御神筆が中カにない。ドレほんに是は一軸の包シで有た。雪の下といふ帕もなくして鈴の撞木が入して有ル。ハア。はつと四人が顔見合せ忙て。詞なかりけり。

久兵衛心付キ。同宿部屋へ荷ひ込だいたい印の小長持。角の所がめげて有たは四五日以前。扱は其時盗れたかとかけ出せばア、是々久兵衛殿こりや（12ウ）どこへ。イヤ此中寺を欠落した。快典といふ。同宿めがしわざに極マりました。サア其

同宿めが業にもせよ。逐電したれば詮義はならぬ。こりや皆采女が神より受る身の災難。ヤイ娘。おのりや勘当だ親でない。

エ、わたしに何科有てイヤ科はない。恥をいはねば理が聞へぬ。六年以前お宮の修覆とは勿体なくも偽り。そちが九死一生の煩ひ。人參の価に手詰り。久兵衛殿に金の無心いふたりや。二言といはず用立ッて下さつた忝さ。子のかはいさは

誰レしもと。お七の手習イすきやるによつて。是習て絵馬あぎやと。御神筆の巻物を預ケたは采女が誤り。久兵衛殿に科は

ない。おりや覚悟きはめて居る。勘当した（13才）とて云訳はた、ね共。まのあたり災の元トは儕。親よ子よとは守奉る天満宮。御神慮の程が恐しい。出でうせいにも心が有ルと詞するどに云放す。久兵衛親子も取ッ置イつ。云訳胸にとけか

ぬる小雪悲しさやるかたなし。かゝる折しも。三吉がしらせにて床几をかしこへ押直せば。稲垣平太戸倉十内。兩人床几に腰打かけ。身が主人五松殿御先祖の奉納なれば。天神の真筆。口手間いらずに渡さるゝで有ふと存の外カ。八百屋久兵衛と

めには御勘当。ヲ、畢竟妻なし夫トなし。いひ様で不義ではなけれど。先ツ不義さ。誠の不義とは。先約の有ル女に横れん
ぼ。是が不義非道の根元ハ、ハ、ハ、ハ。関東武士のせぬ事さ。こりやいはいでも世間が鏡。なふ采女。ハ、ア。硯の面に
物か、ず。竹の楊枝も遣はざりしに。災難は却て幸イ。互イに親なし(15オ) 主なし氣に入たどし添たがよい。ア、是も他
人の事。構まいと余所目つかふて。涙くむ。

平太大きに氣色を損じ。上のお帳面にもとまつた神筆。失つたは采女が誤り。罪極つた。それ繩ぶつて引立い。畏てかけ
よる下部ヤア暫ク。繩かけふかけまいは此十内が役目。事落去する迄は代官所へ同道いたす。大法なれば大小。はつと諾
も涙さめく鮫鞘の。ニタ腰をさし出せば。受取つてヤイ三吉め。儕を草履取に召抱る時。末々は侍イにと在所の親が願ひ。
それも叶はぬ此しだら上り物に成たニタ腰。直クこ、でお払ひなさると投ケ出せば。久兵衛走り寄り。入札するは町人の役。
此二腰は私が買受ます。采女殿に成かはり。掣(15ウ) 引出物嫁入りの世話するといふ。久兵衛めが詞に。空鞘はござりま
せぬと。聞に嬉しき采女が顔。平太は猶々。むつと顔。ヤア神主めを引立い。イサ十内殿。イヤ先ッおさきへと心を残して
打つれ行親子の別れ舅の別れと見送れば。言たげに見かへれと急けくと下部がつかうどぜひ泣々。しどろもどろにあ
ゆみ行。

影見ゆる迄見送つて。采女殿案しさつしやるな。お七といふ娘持つて子の不便ンさ知つて居る。氣遣イをせまいぞや。是はし
たり。二人ながら泣いて居る所でない。十内様のお志侍イに成て舅殿の難義救しやれ。預つて失ふた御神筆。取隠して
おかぬおれが身の云訳に。小雪はこつちへ連れていぬ。草でかけば。柩の(16オ) 木篇に。久兵衛の久の字を合せ杓と名

をかへ。世間もあれは下女分シ。祝言の盃は追ての事。聳引出物受とられよと。両腰渡せは押戴き。お札詞につくしがたし。主人の情舅への孝。此所の名の苗字として。拙者けふより湯島三吉と刀ぼつ込り、しさは。侍イ馴し身の取廻し。迎の事に御神筆の。表具の仕立御存あらば。ヲ、いふ迄もなし。娘が書いたるあの。松竹梅の絵馬がよい目覚。アイと、様のおつしやる通り去ながら。昔の墨と今の墨。其色艶はかはれ共常磐の色にかはりなき。松といふ字の筆勢能。竹は直クなる筆立の。梅といふ字にお心をと。おもはゆげに袖覆へは。

三吉はつとかんじ入。是天神の御引合せ。(16ウ)立願シこめて身は跡より。コレ〱お杉。久兵衛殿親子の供して早く〱と気をせけば。アイ〱目立ぬ様に裏門から。さあこなたへと打連行。下女も振袖お主も振袖ふり合せたる。他生の縁ぞふしぎなる。

馬場先のかたより万づ屋武兵衛太左衛門。手下の悪者面々より棒引さげてかけ来り。あの前髪め最前の仕かへし。たゝめこぼてと追取巻ク。ホウしほらしき町人めら。咽筒に風穴の明いたまかせ。とつびやうじもない事まげ出すやつ。草履摺の時でさへ。尻餅を振舞た。今侍イに成たれば。料理方は又格別と裙。引からげ。身繕ふ。イヤ其ほうげたぶつかうせ。か、れ〱と打かくる。かいくゝつてより棒もぎ取なき立〱へ追まくり。(17オ)

取てかへす三吉をやり過して窺ひ寄。武兵衛と太左が両方より。コリヤさせぬはと腰がらみ。ヲ、合点と左右をのべ。首筋摺シであたまとあたまはつし〱。眼くらんで武兵衛は片息。がむしやの太左がしがみ付。かふ後抱にした所は。お七が絵馬の隣にある。吉庵が祇園の火灯。さし詰おれが忠盛かい。ヲ、そふおつしやれば逢つた時。麦藁笠をぬいでの

勝負とふりほどけば。たちろく足を踏しめく。掴かゝるを真のあてうんとにつけに。反かへる。

武兵衛見るより。マアそりやどうよく。兄貴一番待ッてもらをと。走り寄て三吉が。帯を掴んでどうど座す。ハ、ハ、ハ、

正面ンにかけてある。草摺引の絵馬のうつしか。瘦朝比奈の(17ウ) 武兵衛殿。此三重廻りを引ちぎるか。其両腕を引ぬく

か。二つに一つ。カ一ぱいお引なさい。コリヤ。くくくく扱ッても動ぬ。ナンノ動ふそこのけと。引たをして踏付る。

其間にうごめく太左衛門やうく。起て力ラ足。しやうこりもなくかけよるを。同じ枕に踏付く立たるは。鬼を踏敷其

勢ひ鍾馗の絵馬に異ならず。あれよくと悪党共声計りにて寄付カず。群る中へ二人が首筋引掴んで投付れば。脚腰たゝず

ぱんやのごとく。ほうく打つれ逃て行ク。

ヲ、実尤。人に踏れて恥共思はぬどろほの常。長追無用と襟打合せ。乱れし鬘を。かき繕ひ。早御暇と 賽の三拝九拜。

天満宮の御利生にて。御神筆の一軸をたづね(18オ) もとめて永代の常燈明。御神前に掛奉らん。意願成就皆令満足な

さしめ給へ。願主。すなはち湯島三吉やまつて申と祈願を。こめてたちかゑる

二二之卷

武蔵野と詠ぜられしに引かへて。人の家居のつきく敷。其諸支配を司どる戸倉十内が一ト構。珍客の御入と居間の小

庭の夏草を。髭ぬく様に奴が掃除。立派を好ム主人のかたぎ頭せり。江戸に名におふ器量よし吉祥院の小姓吉三郎。

情盛の角前髪ニタ筋がけの鬘に。露うく計りびんの艶。銀覆輪の対の鏝(18ウ) のつし熨斗目の茶宇の下モ。切戸口に下

人を残し入来り。ホウ鉄平久しう逢ぬな。おち十内様は御在宿か。ナイイ。今日お旦那は非番。京都五松の雑掌稲垣平太

様。けさ程よりお出なされてござる。おまへ様の越シの様子お上へ申上ませふ。イヤ取次には及ぬ。十内是にと奥より立出。ヤア吉三お上人よりのお使イか。イエ今朝父源次兵衛殿の旅宿。千住の貸座敷より呼に参り。只今が帰りがけ。ム、扱は千住よりの帰りに立寄たか。其方も存のごとく。湯島の宝物紛失せしゆへ。今詮議最中。其外何かと御用しげき故。いまだ源次兵衛殿の旅宿へさへ行ねば。此間はお寺へもお見舞申さぬ。上人は御堅（19オ）勝にお入なさるか。ハア仰の通り寺中相替る儀もなし。ヲ、それは重畳。源次兵衛殿其方がうば。今一人お雛とやらん女を同道にて一昨日当着。手前が屋敷へ落付キ召れと申遣したれ共。千住は源次兵衛出生の古郷なれば。こりや早かふも有べき事。そちが為には母。我カ為には姉人。当春死去の砌り何角の御遺言有たげな。委細に聞て帰りしかと。とへは吉三涙をおさへ。親人やうばが咄を承り。母様に別れし事。今更の様に存られて。悲しき中に親仁様。京都より御同道なされし。雛と申女を私が妻女とし。安森の家相続せよと。お上の仰付られとおつしやれど。母の菩提に出家いたしたき（19ウ）身の願ひ。直キに親人に申もいかゞとさしひかへ。お前をお頼申さん為。立寄ましてござります。ヲ、出家のぞみ殊勝には思へ共。御主人の仰を背ず。雛と夫婦に成家を立てるは孝の道。イヤ私は元ト四十二の二つ子にて。育れは親にたゝるゆへ。出家させんと。吉祥院へ預ケおかれしは母人のはからひ。サレハサ。先年源次兵衛殿大煩の砌りより。寺へ預ケおかれたれ共。世継の男子なければ。髪おろさすは遅からぬ事と思ひ。身が計ひにて去冬半元服させたるは。か様の時の為さ。サアしかれ共。一ト度仏の霊前にて。妙典も授り候へは。此義はぜひ共。叔父者人のお取成シにて。ムウ去年角を入さする（20オ）時は辞退もせず。今更剃髪の望ミとは。よめた。扱は御主人より給ははりし。嫁のお雛と夫婦に成ル事を嫌ふてのぬけくじやなど。見すかすおちの一

言ことに。きちとつまりし吉きち三郎。ア、全くお雛ひなを。イヤ嫌ぬ物がなせ俄にわかに出家しゅつがを望まむ。既に身みが家来けらいの三吉さんきちめが能手た本ほん。
平日へいじつ実まことな奴やつだと思おもひしに。湯島かぬじまの神主かみぬし采女さいにょが娘むすめ。小雪こゆきと不義ふぎしたるゆへ勘当かんたうした。聞きケは八百屋久兵衛やちやくべゑ。若い娘わかむすめをつれて
お寺てらに有あルよし。むさと詞ことばもかはさぬ様さまにしる。こりやはや。自分じぶんに堅かたく身みをもては氣きづかないしと。胸むねにこたゆる詞ことばのう
ら。出家しゅつがせふとは恋こひの嘘うそうはべに見みへておぼこ也なり。

奥おくより平太へい出来きり。ヤア十内じゅうない（20ウ）殿どの。吉三郎きちさんが発心はつしんせふとは合点あてん参まらぬ。エ、イ。そふおつしやる其元そのもと様さまは。ヲ、お身み
が親おや次兵衛じへゑの相役さうやく稲垣いながき平太へい。御主人ごしゆじんの仰おほせを受うケてお雛ひなを媒なかつとする身み共ともなれば。聞捨きずてに成ながたく是こゝへ出でた。ハツ。扱あつかはおま
へが稲垣いながき殿どの。私わたくしが出家しゅつが致いたすと申まをは。ハテおいやるな。坊主ぼうしゆにやならぬ。嘘うそ々々。シテ偽いつはりりとおつしやるには。ヲ、慥しやうな證しやう拠こ
を聞きいた。八百屋久兵衛やちやくべゑが娘むすめ。お七おしちと堅かたくいひかはして。申まを々々それは。ナント。よく知しツて居ゐよふが。生なま若わかい口くちからおぢ貴き
をばかにせず共とも。お七おしちが事こと思おもひ切り。お雛ひなと夫婦ふうふに成なつたがよからふ。媒なかつとの此平太このへいは。湯島かぬじまの宝物ほうぶつ松竹梅しょうちくばいの一軸いちしやく。詮せん義ぎが済すま
次第しだいに上京じやうきやうする。それ迄それまでに早く祝言しゆげんし召まをれ。悪わるかれと（21オ）思おもふていふじやないナフ十内殿じゅうないどの。左様さやうく。平太殿へいの仰おほせも其
方かたが為ため思おも召まをての事こと。しかし。お七おしちとやらんに訳わけ有ある事こと。覚おぼえなくはないといへ。イヤ是こゝ々々十内殿じゅうないどの慥しやうな事ことさ。吉祥院きちじやういんの同宿どうしゆく。
則すなはち吉三きちさん傍輩ぼうばいに承うけつた。ムウ手前てまへの同宿どうしゆくにお聞ききなされしとな。クドイ。常念坊じやうねんぼうは先まづ月つき上旬じやうしんより身み延のび参まり。連才坊れんさいぼうは百日
余あまりの病氣びやうき。弁長べんぢやうはまだ幼少せうせう。扱あつかは欠落かひおちいたした快典くわいでんにお聞きなされたかと。問とれてはつと口くちとまくれ。イ、ヤ快典くわいでんには聞
ぬ。ハテお隠かくしなされな。快典くわいでんに左程さじやう入魂じゆつこんなれば。其元そのもと様に詮せん義ぎが有ある。イヤこいつ慮外りょがい千万せんまんと反打そりかくれば。ア、御短
慮也先ごたんりよツ暫しばらくく。吉三きちさんさがれ。ハツ。下くだかれ。ハツ。ひかへいといはゞひかよふ。湯島かぬじまの宝物ほうぶつ（21ウ）吉祥院きちじやういんにて紛失ふんしつの砌せきり。

逐電したる快典は今お尋者。そやつに平太殿がお近付とあれば。此場が何とやら。ナア稲垣殿。左様でござるまいか。若輩者の申す事必お心に。何が扱。よしない事にか、つて退屈致いた。御酒一献たばませふか。成程くいざ奥へ。吉三郎は罷り帰れ。ハツ。平太様。吉三。其内対面。さらば。おさらばと。立出る内庭つたひ。平太も遺底きみ悪ルく。心を残す尻目づかひ。ひらりと打たる小柄の手利剣。中カに隔る十内がたばこ盆にてはつしと受。コハ思ひがけなや稲垣殿。たつた今挨拶致いた拙者が詞を反古にして。小柄を手利剣に吉三郎を何となさるゝ。イヤサそれは。モ、物でござる。媒の拙者なれば。其小(22才)柄を吉三郎へ引出物にせふと存て。ホウ然らは十内取次致さふ。表に銀の三疋獅子。裏には金ンの横鏝。持て帰れと。渡せは吉三は押戴き。此場を遁る、首尾上々吉祥。院へとへ立帰る。

御仏の妙なる法の菩提所や。吉祥院と聞へしは人の敬ひおもくしく。尊き寺を仮住居。お七と杉が方丈に取ちらしたる針仕事。互イに思ひより糸の。裙つじ揃ふ主従の中睦じく差寄て。ナフお杉。わしはけさから此いたいけな豆巾着に。べらくとか、つて居るに。其むつかしい仕立物。もふしやんと出来たそふな。どれ引合そかへ。アイそんならお頼申ませふ。わたしもついにこんな合羽は仕立た事なけれ(22ウ)共。三吉殿が旅立の用意。間に合の一二三所。アレ又嘘ばつかり。是程立派に出来た物をと。合羽を手ン々にた、み付ケ。イヤなふお杉。今迄はこなたにさへ隠していたが。わしが下着を見て下されと。上の一ト重を脱かくれは。もへ立ッ色の緋縮面。乱レ薄に吉の字と三の字を。江戸紫の縫模様。テモ扱も見事く。いつの間にやらこんな下着拵て。よふ今迄隠してござんした。そして手のよい事はいの。誰かいたへ。サア吉三様にかいて貰て。縫イにして着て居る心は。一寸シも傍を離す。離すまいといふ互イのたのしみ。是程に思ふ中も。本郷の

家普請ができたとして。か、様は悦んでけさとうからいなしやんす。と、様もわしもけふ中にいんだら。吉三様に(23才)逢フ事が成ルまいと思へは。身を切ル程悲しい。ヲ、そりやお道理。折悪ふ吉三様は爺御が京からお下りとして。千住の貸座敷から呼とにこずばい。互いにいひたい事も有ル物。早ふ戻らしやんせいと。見やる表に。忍ぶ姿の深編笠杉は立寄。ヤア三吉様か。下心の悪ルいいつの間にござんした。ホ、さつきにから様子は聞た。仮令おれなりやこそ大事なけれ。お七殿の下着の模様。外の者が見付ケたら。ム、為にならぬといふ事かへ。かたくろしい何じやの。こな様やわしも。互いに心中様々の事した身なれど。恋こがれた程あいたとやら。日外からろくに逢イにも見へず。適用があればつまんだ様にいふていなんす。コレ合羽も仕立て置いたが。旅立(23ウ)が誠じややら。但し外に面白イ事が出来たも知れまい。ハレやくたでもない。三吉がさいて居る此鮫鞘の大小は。そなたの父采女殿の譲。刀にかけて見捨まいといひかはした。武士の詞に違イはない。お七上郎の手前も有ル。ごくにもた、ぬ悟気仕やんな。イヤわしに遠慮はない程に。あの数寄屋へ連れ立ていてとつくりとお杉の合点の行ク様に。ア、いや左様にゆつくりとした隙はない。今日此お寺へ来りしも。松竹梅の一卷紛失の節。欠落した快典が国所を聞合せ。いづく迄も詮義に行ふ為。旅立といふは此訳と。いへはお杉が疑イはれ。ア、それ程にわしがと、様の難義を救ふと思ひ。心をつくして下さんすかと。涙ぐめはお七がきてん。ヤアあれ。本堂から(24才)誰レやらくる。此間にちやつと数寄屋へと。押やらる、をしほにして。二人は打つれ入にける。新発知の弁長が。常香もりさし出来り。ハ、ハ、ハ、見たぞ。ヲ、おかし。杉と三吉が数寄屋へぐす。ありやこそはいつたヲ、おかし。ア、是々。なんぼ年がゆかいでも。出家共有ふ者が。そんな悪口いはぬ物。コレこな様のやうなかは

いらしい。物いはぬ坊ン様ンにやらふと思ふて。美しい豆巾着縫て置いた。ドレレ。ほんによいのじや下されレ。サア是をやる程に。さつきに拾しやつた。わしが起請を戻して下され。ヲ、其中着とかへレすりや。こちや大きな徳じや物と。懐より取出し。右と左りに引かゆる。拍子に巾着引たくり。飛フがごとくに翔行。コレなふそれは横着など。（24ウ）追かけ出んとせし所へ立帰る吉三郎。ヤアよい所へ戻つて下さんした。待兼ていたはいなと。すがり付ケはヲ、道理レ。本郷の普請出来とて。お袋は先きたつて帰らしやる。ぜひけふ中に親久兵衛殿と連立。サアわしや本郷へいぬるのが悲しさに。胸をいためて居るはいなと。打しほれるは。ア、いや其難義より。此吉三が身の上にも。降てわいた難義が出来た。エ、そりやまあひよんな。ちやつと訳を聞してくだんせ。サレハけふ父源次兵衛殿の旅宿より。呼とに越れし其訳は。此度家督相続の願ひ叶ひ。御主人の北の方のお差図にて。お手廻りの姉雛といふ女を。此吉三が妻に下しおかれ。父が相役稲垣平太が媒にて。則チ千（25才）住の貸座敷に彼ノ女。我カうば諸共。迎の為下られしといふに恟りエ、イ。そんならおまへは。其お雛様とやらを女房に持ツ気かへ。ハテ扱早合点な。それがいやさに今帰りがけ。おち十内殿の所へ立寄り。色々と辞退したれば。彼ノ媒の平太が居合せて。わがみとおれが云いかはして居る事を。誰レに聞たやらおぢ者人の目の前で。術ない事の有糸と。語れはお七も悲しさを増り。互イの難義問とはれ。当惑涙にくれ居たる。折もこそあれ万屋武兵衛。弁長引連れくるやいな。二人が中へつ、立て。にらみ付たる有様は。時遊ぶ番の雉子。鷺が見付ケしことくに。わなレふるふ計也。ヤア比武兵衛がそれ程こはひか。久兵衛殿夫婦に貰（25ウ）て置いたお七。よふそ、なかして疵付ケたな。イヤ是武兵衛殿。当推量な事いふて。跡で後悔さつしやるな。ヲ、胡乱な事はいはぬ。此

弁長に証拠に成ル物を。今門前ンで貰ッて置いたれどめつたにや出さぬ。久兵衛や上人の目の前で。手しぶい詮義見せ付ると。聞クより三吉出るにも出られず氣をもめは。

杉がかけ出。コレそりや無体じや。あなた方にみだらな事のないは。わしがよふ知て居る。ヤア一ツ穴の狐め。腮た、くな聞ク事ない。どろばうめらうせ上れと。二人を引立かけ入れは。コレなふ待てと杉がつゞけは弁長も。跡に引添イ入にけり。

時しも表に下部が声。安森源次兵衛様御出也と告る内。駕籠かきすへさせ供廻り門前ンに残し置キ。(26才)しづく通れは。

日玄上人立出給ひナフ珍らしや源次兵衛殿。御内証お果なされし段。書中にて仰越サれしが御愁傷さつし入ル。ついては家督相続の為。吉三郎を連レ上られんとの義。主命といひ。彼レが出世の筋なれば愚僧も満足。サレハ。其義を最前も駈に申

聞すれ共。何とやら不得心な返答。何ンぞ身分ンに差構な筋でもござるか。イヤく左様では有ルまい。愚僧がとくと申含ふ。ソレく弁長盃もてと。挨拶半の襖越。うせふくと武兵衛が声。吉三お七を両手に掴ンで引立出れは。久兵衛杉

もつゞいてかけ出。留るも聞カぬやら腹立。コレお寺様。此吉三めは密夫じや。女房を盗ンだはいの。うぬらをまあどうしてくりよ。ア、是々。爰に吉三(26ウ)が親父もござる。兎相な事いひ召れな。イヤいひまする。堪忍ならぬ証拠は。是今

爰で読程に。残らず耳を煉掃して聞てもらを。起請文之事。一ツ。其方様と夫婦の契約致シ候に付。御出家を止させ申ス上は。私もたとへ親々の氣に背候共。縁付いたし申間敷候。是から奥は神おろし。よし様まいるお七より。ナント。是でも密夫

でないか。サア舅殿。とふ成と此聒が立ッ様に。埒付ケて貰イましよと。のつびきさせぬ二人か身の上。胸に焼金さすごとく

とかふ詞スエテもあら涙中。きへも失フシたき風情也。

久兵衛地ハレたまたらず。ヤイめろめ。いつの間に此様な。大膽だたんな事よふ仕出したなあ。今度の普請ふしんに付。段々武兵衛殿の世話に

(27才) 成たれば。腹立ちチは重々ちうく尤。おりやあの人へ一分ぶんがた、ぬはい。母はこんな事はしらず。本郷ほんたくの新宅しんたくへ。家移やうつりを悦けんで今朝けさとふからいんだ。此しだら聞たら大ていの事じや有まい。不孝ふかう者め恥はぢしらすめと。扇あふふり上うケ打た、けは。

上人じやうじんしばしと押おとゞめ。全まづ彼か等らに不義ふぎはない。科人しやうじんといふは此坊主。トハ又またどうして。ホ、あのお七おしちが。賤いやしからぬ容よう義ぎに。ふつと一念まよひ迷まよの心こころがおこつて。戯たはむれ事をいひしを。稚心おきなに誠まことと心得こころえ。其起請あきまを認したて送まふとかな思ふたを。取落う

した物もので有あふ。イヤ是こゝお寺てら様。此武兵衛ぶへいゑいをちよろこふ見て。ばかな挨拶あいさつなされても。起請あきまの文字もじははがされまい。サレバサ。今聞いまきた文ぶん言ごに。其方その様に御出家ごしやうけを。やめ(27ウ) さす上うはと有あルじやないか。吉三きちさんは出家しやうけじやないはいの。殊あやに当名あやなのよ

し様さままいるは。吉祥院きしやうゐんの吉きちの字な。ム、いか様さまこりや尤なほらしい。すりや慥たしかかにこなたじやの。面白おもしろい。女房にようぼう狂くるひさつしやるなら。魚うをも鳥とりもしてやらりよ。幸さいい道の鳥屋とりやで。見みせ鶏卵たまごの内うちたつた一つひとつゑじめてきた。試こころみにしんぜて見みよふと。袂たもと

さがしてこつこつりいはせ。盃はるに打込うちこんで。サアお寺てら様。うまそふな鶏卵たまご酒しゆ。一つひとつ参まゐれと突つ付ける。ヤア何なにじや。身共みどもに是こゝ呑のめか。ハレ疑うたがいの深い人ひと。座興ざかうとは云いいなら。飯かりにも戯たはむれをいふたれば。邪じや姪いん戒がは破やぶれたれ共ども。殺せつ生しやう戒がは得え破やぶるまい。

へ、へ、へ、ホ、ホ、。そふ有あふと思おもつた。まつかいな嘘うそつばちが。咽骨のどほねに覚おぼ有あルから。何なにとしていくまい。いやといやれば(28才) 吉三きちさんは不義ふぎ者もの。目めの前まへでしやつつらむくが。それでも呑のめぬか坊ぼく様さま。くらはれぬか梟頭ふくとう殿どの。ム、すりやぜひ

共呑とものめじや迄まで。武兵衛ぶへいゑい。あんまりむごいぞや。いかに無体むたいをいへはとて。一字いちじの寺てらを司つかさどり。上人じやうじん共どもいはる、身にみに。鶏卵たまご

酒を呑マそふとは。身共が無間におつるなら。お手前は叫喚の。苦を受けるのが不便なはい。といふて吞ずは聞れまい。愚人の目には鶏卵酒。我カ眼には清浄池。呑んで疑念をはらさんと。ずつとほさんとし給ふを。三吉かけ出。盃取て投ケ付けは。

悔りして顔打ながめ。ヤイばりめ。うぬはいつやら湯島の天神でも狼藉。此武兵衛に出ツくはせは。邪魔ひろく。イヤ邪魔でない。誠お七が男といふは此三吉。イヤ(28ウ)様々の事をほざきおる。但しお七が男といふ。ヲ、慥な証拠は其起請。名当のよし様是三吉の吉の字。ハアこいつ迄が同じ様に人まねひろくな。其手はくはぬ。イヤサ此三吉が不義を隠して下されんと。吉三殿といひ。上人様迄お身にかへてのお情。有難ふは思へ共。此身の誤を押黙て。あなた方に難義かけふ様がない。サアお七。もふ隠されぬ。おれ任せにしておきやと。上着の肩を押ぬがせ。コレ見たか武兵衛。下着の模様三の字と吉の字を。縫にしたは三吉。ナント是でも上人様に。鶏卵酒をしんぜるか。吉三殿を疑ふか。うろたへ者めとはりあいか。此場の難義を引くるめ。俄カ身にかぶる云披。お七吉三を始メとし。皆々かんずる計也。ム、扱は儕が誠(29オ)の密夫じやな。道理で日外湯島で。久兵衛親子が肩を持チ。よふひといめにあはしたなア。段々の意趣かへしと掴か、るを源次兵衛。がんばるか取て打たおし。我カ駢吉三郎を。不義者となせゆつた。サアそれは。サアお七が不義の相手は三吉。駢吉三郎になき名を付。武士たる者を密夫と能クぬかしたなあ。打放すやつなれど。血をあやするは寺院の穢。命チは助たうせおれと。つき飛されて二タ足三足。思へは無念と立寄ルきつさう。まだ義者ばるか。云分有ルか。けもない事。いやで候。こりてそろくいんだが勝と。跡をも見ずして逃帰る。

三吉地色ハルしさつて手をつかへ。お久しや源次兵衛様。先年旦那のお供して上京の時。お目にかゝつた儘。此度当地へのお下りの様子も。ホウ定めて委細聞たて有ふ。不慮な事ゆへ其方。るらうの身と成つたと聞キしが。シテ彼ノ松竹梅の一軸。いまだ詮義の手筋もなきか。サレハ。其手が、りは則ち此お寺の同宿。快典と申者と聞クより上人。ヲ、其義は愚僧も心が、り。逐電の後行衛しれねは。大方生れ古郷へ帰りしに極つた。シテ。快典が古郷はいづく。ヲ、信州高井郡荏原村。ハ、ア幸々。其荏原村は此三吉が古郷。案内勝手知つたれば。さがし出して詮義せん。いふにや及ぶ。一刻も早くおいきやれ。畏つたと裾はせ折。杉がさし出す歩合羽。取て打かけ耳に口。我レに代つてお二人りの。身の上に氣を付よと。懇ウに云合暇申て立出る。

源次兵衛地中氣色をたゞし。コリヤ吉三郎。爰へ（30才）参れと膝元に呼よせ。骨桶取出し前にすへ置キ。ヤイ詞拵め。今三吉が難洪なんじうの場へ出合イ。無事におさめし働キをよい事と思ふか。密通の証拠しやうこに成た女が下着の文字割。三吉と読しを余人は誠と思はふが。我見る所は各別。文字は薄に一字づゝちらしの縫。三の字を頭に置キ。読下せは三吉なれ共。ひつくりかへせは吉三イヤ知ルまいと思ふか。儕が心に覚有ル不義徒いぢらを通ん為。大恩深き上人の慈悲心より破戒して。鶏卵酒をまいるのを。よつくながめておつたなあ。そののみならず。三吉に悪名讓て悦ぶは。人非人といはふが八逆罪の科人。今手にかけて打て捨る。と此源次兵衛なれはいへ共。コリヤ。此骨は儕が母。な。其母がいふ（30ウ）のじやによつてそこは赦す。情なや其性根とはしらず。死ヌるいまはの際迄も。心にかゝるは吉三郎。四十二の二つ子故。出家させんと幼少より吉祥院へ遣し。手習がくもんせいイ学文精出すと。聞ケは嬉しき其中にも。ぐどく思ふは女の習ひ。かけがへもなき一人リ子を遠き東へ放

やり。往来も自由ならぬ身の。案じつもりし此病イ。漸此度。家相統の願イ叶ふて。呼上す悦びはいか計り。早発足もけふあすと成ッて。おもる病イに医療も叶はず。此儘果るはよくくうすき親子の縁シと。思ひ廻せは猶なつかしい。願くは今生で。ま一度顔が見て死たいが。それも叶はぬめいどの道。亡跡の香花も吉三が手から受ケたいと。涙を流して(31才)言舌の廻るたけ。儕が事ばかり云置いて死んだはやい。心根の不便さ。遺言の有増は。最前旅宿でいひ聞いた通り。此骨に成共対面させふと思ふて。持ッて下つたかいかもなく。二タ親が目の前でつらはぢさらす徒者。斯と知ルなら此骨を。直クに身延へ納たら。母はうかむで有ふ物。何シの因果に持廻つて。此さま見するは迷の種。香花は扱おき。親を奈落へ沈おる。不孝者め罪人めと。母に替りつ我レと我カ。詞を尽し理を尽し。或イは怒。或イは悲しむ目の中チにうかむ。涙ぞしんみなる。

吉三ははつと理にふくし。誤りました親仁様。赦て下され母人。此上は何事もお詞は背まじ。左程不便に思召す親の慈悲心冥加な(31ウ)や。責て一日半日も御存生に付添ず。替り果たるお姿と。骨桶取て載きく。むせ入きへ入泣しつむ。ヤアそらくしき後悔涙。まだ親をたばかるか。逆くさつた其性根で。我カ家督は継されず。主人への面暗。親でない。子でない。七生迄の勘当と。云捨て立んとす。上人おさへて先々待れよ。子に折檻の杖あつるも親の慈悲とはいひながら。勘当とは情なし。誤つたといふに違イも有まじ。去ながら此上の念に念。暫ク愚僧が預つて。とくと合点の行ク様に理かいと聞いて聞せなは。得心せぬ事有まじと。猶も慈愛の詞にハツト感心し。不所存者を左程迄重々厚き御シ恵。此上の御憐愍。宜ク頼奉る。私とてもお聞の通り。(32才)娘が武兵衛を嫌ふては。借受ました大まいの金。立ねはならぬ大難義。ど

ふぞ得心いたす様に。おすゝめなされて下さりませ。ヲ、何が扱気遣ひ召るな。二人共に愚僧が預り。急度心を改メさせ。御両所へかへしませふ。ハ、ア忝し。其お詞を聞からは最早安堵。幸イ身が家来共。門前ンに駕籠も待せ置テは。後程おかへし下さるべし。いかにもく。お七は此方より送らせませふ。ハ、ア然らはお暇申ス。ヲ、御両所共に帰らしやるかおさらはと。吉三お七を伴て。上人奥に入給へは。

跡に二人リの親々が式礼目礼久兵衛は。杉引連して本郷へ。源次兵衛は旅宿へと立別へれてそ帰りける。

既に其日も。入相の。鐘は常聞物なれと。心から（32ウ）とて。身にこたへ。胸にこたへて憂事の。重る数や五つ六つ。

お七はしほく立出て。暫し涙にくれけるが。一途に思ひつき詰メし。用意の剃刀取出し自害と見へしを。コレく待た早まるまい。ヤア吉三様ンか。とめずと死ナして下さんせ。サア其死るといふ訳は。ハテ親々の手前をなため。預かると有ル上

人様。定メて二人りを走ラスのか。但しは外によい思案が。有ての事かと思ひの外。やつぱり思ひ切レとの異見。まして武兵衛が当前の証拠にこまり。一旦得心していんだり共。肝心の起請が手にあれば。いつ迄も難義は遁ぬ。イヤそりやちつ共

気遣ひない。起請は爰にと懐より取出せは。エ、イ、それはどうして。サア今奥で弁長か（33オ）いふは。最前のごさ紛れに。武兵衛が落していんだを。拾ふて置いたとくれおつた。ドレく。ほんにこりやわしが起請。扱は小心にも。是で二人りが難義するを笑止に思ひ。拾ふてくれたはしほらしい。それが戻れば武兵衛が手前案じはない。さあどこへなど連てのいて。イヤそふは成まい。先ツ一旦ン親達の心を休め其上では。イヤくくそふいふて云号の。お雛様に添気じやの。ハテ訳もない其為の起請。おれが書いたはそつちに有。是をこつちに持て居れば。互イに心のかはらぬ証拠。遅かれとかれ

添ではないか。ヤア〜兩人そりや何いふと。立出給ふ上人。二人が中に押直り。去りとは聞分ケなき者共。今奥でいふ通り。吉三郎は(33ウ)お七が事を思ひ切り。云号の女を婦妻にぐし。親の家督を継ぎざれば源二兵衛の武士かたゝぬ。そこを察して両親に受合たる愚僧。出家侍イ義は替らぬ。ぜひそち達が得心せねは。傘一本寺ひらかふか。ア、申勿体ない。幼少よりの御厚恩親にも勝る。おまへを退院させましては。ム、然らば聞入して親元トへ立帰るか。成程違背は残しませぬ。コレ吉三様。其筈じや有ルまいがの。コリヤ〜お七。そちとても吉三が事思ひ切ラずば。久兵衛に頼れた愚僧がたゝぬ。エ、見限り果たる者共。無益の詞を尽して残念シ。我住職も是迄と。云捨て立給へは。マ、待て下さりませ。兩人共に得心か。アイと互いに顔見合せ。ぜひに及ぬ吉三様シ。お七。一度。(34オ)にわつと声を上泣しづ。むこそ道理なれ。俱に不便シと上人も。目には涙を。持ながら。時刻移さは妨と。ソレ〜男共駕籠をもて。源次兵衛の御家来も。迎イのかごを是へ〜との給へは。ア、冥加ないおさしづと。いふも涙にしほれ声。二人は漸。庭におり。コレお七。かふ成ルからはおれが事をふつつりと思ひ切。親達の心に随ひ。随分シ共孝行尽しや。ハテそれは同じ事。おまへも親御の氣に背ず。お雛様シに添て下さんせと。互イにうはべを取繕ふ心のくるしき詞にくろめ。面々かごに乗移れは。ホウ兩人共に聞分てくれて満足。始終にべなき愚僧が異見。嘸木の端の様に思はふが。素性法師や道因が。恋歌をよみし例も有。(34)そち達がか切なる思ひを察しては有ながら。たとは、庭の。あの柳。緑の色の深けれど。散時あれはこそ人にも惜れ。又くる春に栄を見すまつ其ごとく。世上の義理と親々へ孝行の為と明らめ。一旦縁を切ルとてもながらへあらは品に寄り。つながる時節も有べきぞ必よしなき心を持つな。早とく〜との詞に随ひ。かご昇出せはいと猶不便さ増る落涙に。衣の袂をしば

らるゝ。○地中、勿体なや上人様のいかい御苦労。忝ウ共嬉しい共いつの世にかは忘色ふぞ。コレ申吉三様詞。今のお詞聞てかへ。此上にまだどの様なせつない事が有ふ共。はやまつた事して下さんすな。いやとよわしが身の上より。案じらるゝはこなたの事。短気たんきな（35才）心持タしやんな。ヲ、ふたり共によふ得心してくれた。随分無事で。おさらは。さらは。さらは。さらは。といふ声も次第ウに遠とをさかる。道は二タ筋ひとすじに思ひ合たる比翼ひよくの中。引ハルはなされし籠かごの鳥。泣ナク々々。別上れ。帰上りける。

三之卷

東路あづまぢも都ハルフシに同じ。よねの風。姿ウの花の色深く酔ウの紅葉もみぢに月の眉ハル。雪の肌はだへを打任せ情商ウふ新吉原中。頃日このころしこりの大々臣都地ウのひらとそやされて。爰ウに浮名あひやを揚屋町三浦屋の八重菊やえぎくを。我オカ物顔のしつぱり酒。

付添地ウア牽頭たいこは万（35ウ）屋武兵衛油屋ハルの太左衛門色。ナント両人詞。京都五松殿の雑掌ざつしやう。稻垣平太共いはるゝ身が。恋なればこそ此間より様々と口たれて。八重菊殿を根引の相談しかけても。都の客はお嫌ひやらついに一度の逢瀬あふせさへ叶はぬ。哀地ウレな事と思ふてくれと。膝ひざを枕のころく目。ハアいか様是はひら様のがお道理。爰は武兵衛が取持チませふ。菊様もあんまり張はりが強つよまる。ぜひに今宵こよひは打とけ給へ。いやとはいはさぬかための盃さかづき。爰で一つと太左衛門も俱とも々に。すゝむる詞の先色キ折て。コレお二人り様詞。おまへ方迄がやほらしい。其挨拶あいさつ置いてくだんせ。湯島の神主の娘にひら様が首だけほれて。其おかたの面かほざしに。此八重菊がよふ似たといふて。根が当座ねのうはきじやによつていやで（36才）ござんす。エ、イそんな事どいつがぬかしたと。恠地ハルりすれば禿かぶらの吉弥色。爰詞に居いさんす太左様地ウのいふてゝ有アつたと。さし出るを扇あふでびつしやり。

商買が油屋なれば。すべつたは口の科。武兵衛丈。ひら様へお取成シお頼申す。おの字でいは、おうといはぬが。恋路の手くだ。ソレジヤハくぜつしかける下心恋じやへ。うたふなかばへ。亭主が調子も巽上り。申々。ひら大臣様に逢ふといふて。きのふきた願人坊主が門口に待て居ます。ヲ、其苦く。諸事は武兵しめし合せて置いた通り。ア、畏った。坊主に逢つておりのりは。私が致シます皆々奥へとす、めやり。

待間程なくつ、かく。吉祥院の同宿快典。逐電の其後は住所定ぬ三界坊。コレハく。(36ウ) 久しうあはぬ内に哀れな形になられたの。サア是はお師匠の目をくらました罰。こなさんや平太様に頼まれて。松竹梅の巻物。シイ。それをこは高にいふ事かいの。デモ盗んでやつたに違イはないはさ。それに褒美の金を下されぬ。ひらではなふてへら大臣。奥にござるなら此手紙渡してくだんせと。さし出せは武兵衛おつ取。ハレめつさうな。稲垣平太様快典よりと。互イの本名顕してかく物か。けふはさし合イなお連レがあれば。先ッ此手紙は持つていにや。今迄二両や三兩づゝ。平太様をせぶつてとりやつた算用語は。此武兵衛かしておませふが。但し又うさんなか。ハテ何シのいな。八百やの娘のお七にほれて。焼跡の普請してやる様な大腹中なこな様シ。違イは有ルまいが。日の延る(37オ)のが迷惑。サア急にせいらくするはいの。けふはきりくいでたもと。せり立られて快典が。件の手紙を懐中し。どうぞ今夜の酒代程かしてくだんせ。エ、宿なしに成つたりや。けびた事をいふは。きつさりと一角はづまふ。ソリヤ忝いと。扇に受て載きく。是からなじみの柿暖簾。やす物かふて楽んととつかは急ぎ立帰る。

始終を立聞ク稲垣平太。ヤアく武兵衛。何かに付ケていかい世話。京都より下りふと此廓で出合イ。一大事を明カして頼ミ

しも。其心底を見すへしゆへ。イヤ此世話致すも。おまへを頼んで吉三とお七が縁を切つて貰たさ。ヲ、其方とお七を夫婦にして。八百屋が下女に成て居る。小雪を身が手に入りたいと。のぼり詰メたる恋のかけはし。顔は上気に（37ウ）うす紅梅の。帕包を取出し。快典を語り。此松竹梅の一卷を盗取しは深き方便。是を越度に主人の家を断絶させ。年月たつて平太が尋出したと禁庭へさし上。身が出世する其時には。そちも太左衛門も侍イにしてとらす。ア、有難い。其お詞に違なくんは。御新筆の包んで有ル。雪の下々の帕私に下さりませ。ホ、望ムも道理。獨といふ獸の腹ごもりの毛を取りて。雪の下の唐草を織込し希代の唐織。いか成打身金瘡にても影をうつせは。即座に直る重宝。望ミに任せお身に得さすと投出せは。ア、忝し。此帕は武兵衛が家のたから物。ヲ、此一軸平太が肌を放さねは。かゝる大事外カへもる、氣遣イなしと。互イに点きささ、やく後へ太左衛門。申々ひら様。今（38オ）奥の亭座敷から見ますれば。安森源次兵衛殿が。ホ、此所へ見へる筈。毎日常衣紋坂の薬湯へ。駈や嫁を連れて入湯と聞キ。使イをもつて源次兵衛を招きよするも。吉三をせこめてお七が縁を切らそふ為。何シと武兵衛嬉しいか。ハイ。日外寺での意趣も有。此武兵衛が出合つてはいな物。ヲ、それ。見付られぬ様に兩人共。裏の路次より早く。畏つたと猫の声聞ク鼠のごとく。二人はこそく立帰る。

傾城八重菊奥より出れば。目早き禿かアレ。何かこはいやら。武兵衛様シや太左様がはづさんすと。いふをせいでして。コリヤさす人がくる。兩人共に何ンにもいふなど。ひそめく所へ亭主が案内。安森源次兵衛吉三お雛を相ぐして座敷へ通れは。コレハ。此間は打たへ旅（38ウ）宿へもお尋申さぬ。イヤ平太殿。それはお互イ。今日お氣ばらしに是へお出なされしとて。駈やよめをつれて。拙者にも参る様にとお招きに預り。湯を早く上つたれ共最早晩景。お待遠に思召ふ。ナン

ノく。御酒嫌ひな源次兵衛殿。色酒一献といふも不調法。しかし。御子息へ御内意申たい事も有り。いへ共吉三が打とけぬ目色を見て取ル源次兵衛。コレハしたり。漸此間寺から帰りし。都の御所て育つた嫁。全盛なお傾城に氣を吞れて。稲垣殿へ御挨拶もせないか。イヤそふでござらぬ。日外おち御十内殿の屋敷にて出合イ。為を存しいふた事もあれは。此平太をけむたく思ひ。それゆへの不興顔じやな。イ、エそれは平太様のお氣の廻り。此雛を媒のお前じや物と。いふ(39オ)を打けし。本郷の八百屋が娘に心中立テ。御主人より給はりし嫁を嫌ひ。媒の此平太を踏付ケにお仕やるかと。かさにか、つてきめ付ケれば吉三郎。日外といひ今といひ。重ねくの雑言。イヤちよございな。平太に向つて反打ツかと互イに色立見へければ。

源次兵衛中に隔り。イヤア扮ひかへい。イエ余り成ルいひたいがい。サアしづまれといはしづまれ。ナニ稲垣殿。扮が不届キを御異見なさる、お志は忝イが。此源次兵衛は其元に又御異見が申たい。ムウ平太に異見とは。ハテ湯島の重宝松竹梅の神筆。詮義の役目を蒙りながら。お若いと申ても余り成ル放埒。イヤ拙者が傾城狂は主君への忠義。盗手のしれぬ一軸。遊興に事よせ。諸人に交て詮義致すが(39ウ)放埒でござるかの。今宵爰に其元をとめ置キ。色氣のない遊びお目にかけふと。いへはお雛が氣の毒げに。そふおつしやつても舅御様は御病中。雨もどふやら降そふな。イヤ雨が降ふが鐘が降ふが。今のごとき批判を受ケたれば。平太が忠義の潔白を。お目にかけねは武士が立ぬ。スリヤどふ有てもお止なさる、じや迄。ヲ、おんでもない事。ム、親人がいやとおつしやつたら何となさると。さし出る吉三を父がねめ付。コリヤだまれ。身は平太殿と跡より帰る。そち達は勝手に待タせ置いた角介をつれて先キへ帰れ。ハア。然らば私は。日本提の桶

と頼置いた。樋守が番屋は此傍と。見廻すこなたの番小屋の。戸を押ひらき。ぬつと出るは樋守与五蔵。はちまきの手拭取て。吉三が腰をほと、打。さつきにからこな様方の。ちんく咄を聞て居たがエうまいなく。番屋をかすべい。序に鱈もらしやんせ。ヲ、あの人はいのとつけもない。そりや何ンの事ぞいの。ホ、御合点がいかないか。此吉原の廓では。だかれてねる事を鱈といひます。あの前髪様が。お七といふおてきに心中立テぬい(41ウ)て。今の様に間に合いいふてだまさんすを。廓ではかけるといふ。あんまり気強ふいはず共。ちやつと居膳くはしやませと。おどけか、れは吉三郎。コレ与五蔵。おれが落した銀の三疋獅子の小柄。尋てたもつたか。イエまだでござんす。夜さへあけたら。此日本堤八丁の間を尋。小柄はおらが持つていて上ケませふ。所はどこじやおつしやりませと。聞てさし出る奴の角介。こちらの旦那は。安森源次兵衛様といふて。ム、そんならおまへは。御子息の吉三郎様かい。それにお云号のお方とあれば。此間薬湯伝七方で聞及んだお雛様。ヲ、いかにもく。手前親共が旅宿は是より見ゆる。千住の町の貸座敷と。咄の半そりや光ッたはと一度に仰天。ひつしやりごろくこりやたまらぬ。サアく旦那お急キと。角介に(42オ)せり立られ。そんなら与五蔵小柄の事を。頼むくも頼がたなき秋の空。又降りきる雨の足。急てこそは帰りける。

地色ウ 目ざすもしらぬしんのやみ雨具に事を柿暖簾。遊び過して立帰る三界無安の快典が。菰俵を引かぶり。火縄もふつて堤。伝ひに。かけくる登ちらりと見るより。梟頭までと雷声。ヤア与五蔵か。何んの用じやと菰はねのくれは。雲突計りのいがくりあたま。雨の夜すがら所から高入道共いつ、べし。コリヤお坊シ。登でもわぬしと知て番屋を出てきた。兼て咄のほうびの金。今ン夜は慥にしこためて戻つたそぶり。サア分ケまへ貫はふ。ハアレけちぶとい。分ケまへとは何ンの事。

ハテ此廓で自囉でもな、でも。ふてうまへをおれにくさねは。腰に付けた此柄であたまを（42ウ）梨割。それでもいかとのぶとふか、これは。ハ、ハ、ハ、此坊主首を投出して。去ルお方に頼まれままと仕おふせた。其ほうびにしてやる金。与五蔵。我レに何シの価にこませふぞい。ム、すりやどふいふてもくさぬかい。イヤ今、夜も先キにさし構に成ル連衆が有とて。おれがやつた手紙さへ封をも切ラず。こりや見い。此儘で戻された。近い内に金受取たら。酒代程はどふもせふ。雨のおやみにおりやいぬると。かけ出すを引ずり戻し。ヤイけづり廻しめ。酒代ごかしに酔すない。貫た金を隠せはかうじやと懐へ。ぐつと突込手先キにさはる件の一通。見せては大事と快典が。ばいかへして切封の。名書キを口にてくさせば。どつこいさせぬと手紙をもぎ取り。与五蔵が懐中すれば。

それとられては一大事。隠す程猶見にやおかぬと。（43オ）組合イ捻合泥まふれ。どろくぐはらく雷稲妻。ひつくりかへして与五蔵が。なんなく上に乗か、り。ヤイ願人め。此堤で送柄打ッて。樋守の役目勤ながら。かふした働する事を。うぬにしられた上からは。いやでもおうでも助ちやおかぬ。引ッたくつた手紙をとつくと読で。金設はおれがする。そふ心得てくたばれと。有合フ火繩を首にまとふてぐつとしめ付ケ。やみは危し危き思ひ。引よせて鼻へ手を当。ホイさつても早ふてこねたと。引かづいて前エなる深田へ打込ムはづみ。落しおいたる吉三が小柄。天窓へぐつしやり氣付針。息吹かへして七顛八倒はい上る。与五蔵透さず踏落し。水抜の樋ぶたを上へ引上れば。

漲水に死物狂。樋口へがばと踏込ムをひふたをばつたり快典は。地獄おとしの鼠のさいご。柄おつ取くはつちく。

空には雷電道を照してへ走り行（43ウ）

二上り掛中
うつゝのやみにちる花の下。思ひなき身にくらべこし。さつと浅黄に染ふより。元トの。白地がましじや物。去ルにてもうし
や夫の。にせ柴が色わるふ。やつれ。顔見る悲しやと。三味のねじめの。いとしほらしく。軒端洩くる一トふしや緑の。
竹の青くと。塀を打越シ見越シの亭の高欄に。都模様のだて小袖。かけて干てふ。野分の風に。ひらくと。庭の紅葉の
色そいて。よその見る目も媚し。表門の評札に。京都安森源次兵衛。旅宿所と書きしるす。所は千住の町はづれ。父
のるすとて吉三郎。二階座敷に挽茶磨。ねむたからふとお乳の人。鳥の翻にて茶入にうつし。ヲ、和子よつほど溜つた。ち
つと休てお雛様シの。一トふしに(44才)心を付けてお聞なされ。さつと浅黄に染ふより。云号のないさきの白地がましじ
や。江戸紫のお七上郎に見かへられたと。歌によそへてのくどき言ト。あんまり憎ふは有ルまいがなと。いふ声下々に洩聞お
雛。ア、嬉しいおうばの志。難面は吉三様シ。いやなら此身はこがれじに。心のたけを三味線に。のせて諷ふが二階へ
は聞へぬか。しほる袂の露涙。のべもいくへを。通すらん。アレ聞カしやんせ。あの様にお雛様のいとしらしひ歌と三味。
イヤ茶に挽入ッて居るゆへか。おれが耳へは何ンにも聞へぬ。フウよい手な事計リ。お七殿に義理立ててそふおつしやるか。
イヤ是うば。其様にお七の噂してたもんな。親仁様のお耳へ入ルとお叱を受るぞや。(44ウ)サアそれがいやなら。夕衣
紋坂の戻りに。なぜお雛様にすげなふなされた。ナンノそふではなけれ共。親人も平太殿も。吉原の廓にお残りなさるゝ。
衣紋坂からつゝふりと日はくれる。雨風は頻也。それで一もくさんに先キへ戻つた。ソレ其様な水くさい事が有物かいな。
お供にいた角介さへ笑止がつて。お雛様の手を引まして戻つたげな。道はくらし雨はふる。脇指が鞘走て手を切り。あの
子の小袖迄が血みどろ。まだ洗ずにあれ。高欄にかけて有ル。今からちつと嗜しやんせと。ずつかりいふも養君。い

としさ余あまの異見いけん也。

お雛地色ハルはしとく。二階ハルフシへ上り。ナフおうば。よしない事をいふて。吉三様ハルにさからふて下さんな。わたしが様なふつ、
（45才）かな。京の風がおいやなら。八百屋の娘お七殿の様に。江戸の風を随分見習ならひ。とふぞしてしめやかに。おまへの
お気に入りたいと真実しんじつほれぬく生娘きずめの。心を察さつしてお乳ちの人。コレ吉三様。いつ迄もそれでは済まぬぞへ。否いやか応おうか返事へんな
さい。ア、何しにあの人を嫌きらはせぬ共。寺に居る内お七と。みだらな事の有あったあげくゆへ。祝言しゅげんの盃さかづきする迄。かたく
ろしう見せるは。親人の手前を思ふての事。必恨地ハルて下さんなど。なだむる詞にお雛ウは嬉うしくそりやほんかいな吉三様。ナン
ノ嘘うそをつこぞいの。サアそしたら親旦那のるす事に。お傍そばへ寄よてついちよつと。抱付地ハルカしやんせと押おやられ。じつとしめあ
ふ初恋路はつこひち。よきなき風情フシに（45ウ）見へにける。ヲ、それでこそよけれ。今からお雛様は御本妻ほんさい。お七殿はお妾てかけじやと。
思はしやんすりや恨うらみはない。此中ちゆうも本郷ほんがうから。使つかいに見へたお杉とやらに。何やかや様子を聞きキ。此うばが若時わかの。身に
つまされていとしい。ヤアそんならうば。そなたの身の上にも此様な。難義なんぎな事か有あるかや。ア、有あた段だんかいな。わたしは
元もと東京の町の性うまれ。男撰おとこまをして。御所方ごしょへお末すえの奉公ほうこうに出いたれ共。公家侍くげざむらいのなまぬかつたはいやで。どれかな是がなと。
待まちてば甘露かんろの雨降あめ月つき。右近うこんの馬場ばばの引折ひおりの日。見物けんぶつにいたれはな。何なにが馬うまが放はなれて。そりや蹴けるは。そりや踏ふはと人崩ひとくづれ。群
集じゆの中ちゆうカに。せいひくからず高たかからず。苦味にがみの走はつたよい侍さむらい。一ひと目見みるより。（46才）ぞつとして思おもひ付ついた恋の才覚さいかく。馬うま
にこはかる振ふりをして。抱付ぞまいたれはあちからも此手こをじつとしめて。互たがにちよつと名所なところいふて別わかれたが縁ゆかりと成なり。それか
ら月つきの内に五度三度の出合いに。廬山寺ろさんじの明あけの鐘かね。度々たたく聞きいた其おどもりがくつはいたい懐胎わいはい。や、は安やすふ産うたれと。親達おやの頑かたな

ゆへ水子を先キへ。わたしは直クに此お家へお乳奉公。夫はどこに流勞して居らるゝぞ。所が知りたい便りがしたいと思ふ余り。硯に向ふてぬしに咄する様に。かふ成つた一部始終を書認て。肌身も放さず持つて居ますと。守袋の紐といて取出す封文。表の名書キは見せね共。裏に媚く片假名のより五大力。実も恋路の筆のくせ昔床しく吉(46ウ)三郎。お雛も奥に入相の。鐘かうくと聞ゆれば。扱もくと秋の日の短ひ事はいの。さつきに角介を迎にやつたに。此と、様はなぜ遅ひ。イエお雛様お案しなさんな。お台所迄衣紋坂の伝七が見へて。親旦那様は。廓から直クに平太様と連立て。十内様のお屋敷へお出なさつたといな。ヤア親仁様が屋敷へとは氣づかはし。それをおれにはなぜいはなんだ。伝七がまだいなずんは。様子とはんと吉三郎。勝手のかたへ急行。

二人シもとつかは高欄に。かけし小袖を入れるやら。茶磨を床へ直すやら。二階の障子さしつどひ。見れば表の門前に。定紋付たる挑灯二張。稲垣平太源次兵衛。打つれ帰るくつたく顔。内より出る薬湯伝七。それと見て地に(47オ)鼻付ケ。コレハ旦那様只今お帰りでござりますか。ホ、伝七か。毎日行行薬湯へ。今日は懈怠せしゆへ見廻りに来つたか。ハアいや私が近所に居ます。堤の樋守与五蔵といふやつ。おまへ様へちと御内意申てくれいと。頼ムゆへさんじました。ヲ、何かはしらず。内意とあれは密々に聞ふ。どうじやくと耳さし付れは。伝七がさ、やく度々。源二兵衛が驚ク面色。平太はどこやら気味わるく。さしよればちやくつとやめ。委細は今申上た通り。与五蔵へのお返事は。ヲ、後程其方迄返事せふ。ハ、アそんならお暇申ますと。そ、くさ帰る薬リ湯伝七。心に毒有ル平太は一円よめぬ顔。源次兵衛に誘引れ。玄関より次きの間の。上座へ通れは吉三郎。(47ウ)手づから挽し薄茶を立てて取あへず。平太が前へ持出る。ア、いやくと。心よか

らぬ茶は所望しょもうにおりない。コレハ平太様に似合ぬ仰。イヤサ。夜前よんぜん日本堤にほんづみにおいて。大それた事を仕出した吉三郎。詮義せんぎに来つた平太なれば。毒吞どくのますまい物でもない。コハ身に取て覚おぼへもなき御一言。是は今日私わたくしが挽ひたる茶。自身みづかみにたべてお目にかけふ。ヤイ／＼。其茶を是へもて。源次げんじ兵衛が毒試どくみせふと。恵めぐみも深ふかき井戸茶碗いどぢやわん。おつ取て吞のみければ。イヤ申平太様。此吉三が大それた事を致したとおつしやる。其子細ここほはな。ヲ、今朝けさ未明みめいに。身共みどもと源次兵衛殿同道して。新吉原より帰るさ。日本堤へお身がおぢ十内殿。検使けんしにた、れしに行合い。見れば水拔みづひき(48才)の桶ひに切込きりこまれて居るは。吉祥院の同宿どうしゆく快典くわいでんとある。欠落かけおちせしやつなれば。相手あいてしれぬ聞討きんたうと所の者共の口書くちがき。代官所へ納おさまつて事は済すんだれ共。吉三郎が手にかけたといふ事は。平太が見付た。エ、イ。それは思ひがけなきお咎しやがめ。ホ、慥しやうな証拠しやうこが有ル。日外平太がお身にやつた。銀ぎんの三疋獅子じしの小柄こづか。しがいの道筋みちすぢに立て有た。察さつする所快典くわいでんめが。盗ぬすんで立退のりた。松竹梅の神筆しんひつを奪取うばひて。ばらし召つたで有ふがのと。吉三きちを罪つみに落おさんと巧たくし底意そこいぞ恐おそろしし。イエ其小柄こづかの義ぎは昨日。にほん堤にほんづみにて落した事を。親仁様も御存有て。サレバサ。色々と此親いひわけが云い訳わけしたれ共。小柄を証拠しやうこに稲垣殿いながきの。疑うたがいが晴はぬはい。(48才)然しか共源次兵衛はそふは思はぬ。トハ又なせでござる。ハテいが成なル大丈夫だいぢやうぶでも。非道ひだうの筋すぢにて人を殺した砌せまりには。一心いつしん狂くるて茶を挽ひば。自然しぜんとあらくおりる筈はず。然るに只今吞のみんだ薄茶うすちやの。挽加減ひきかげんの濃こまかさ。吉三が身に覚おぼのない事明白めいはく。ヤアそりや縁者ゆきやの証拠しやうこごくにた、ぬ。茶によそへて身がつてな云訳いひわけ。たべ申さぬぞ。サア吉三。盗ぬすみ取つた松竹梅の一軸ちく。速すみやかに御主人へさし上めさるか。隠かくすと代官所へ申遣し。十内殿に御詮義頼ごせんぎたのりムと。ぬきさしさせぬ權威けんいの高声たかこゑ。覚おぼなければ吉三郎。云訳いひわけ何とせんかたも泣なより。外はの事ことぞなし。父ちちも無念むねんと察さつしやり。此源次兵衛が何かといへは。身みびいきのさたにおつる。じやによつて亭てんへ

(49才) 参つて休足仕る。稻垣殿御免（ハル）あれと。気もせき上（ノボ）す段階（だんばし）子の。音（ナ）トよりときつく。お雛（ひな）が胸（むね）。打（うち）しほれ立出て。申（まを）
平太様。日本堤に落して有た。三疋獅子の（ハル）小柄で。快典はわたしが。殺（ころ）しまして（う）ござんすと。いふに（びつ）悔り吉三郎（色）ア、是お
雛（ひな）。こなたはそりや何いはつしやる。サイナ。おまへは常々（つね）此雛を嫌（きら）しやんす心から。日本堤より先キへ戻つて御存はな
い筈。ヤア云号の夫トの難儀を救（す）んと。かよはき女の身として。快典を殺したとは。庭（にわ）の紅葉のてりはよりまつかいな赤
嘘（うそ）。ア、そふ思召（おも）ヌは御尤。吉三様のお寺に（ご）ざんした時。お七を快典が。媒（なかつ）したといふたさかい腹（はら）が立て。だまし殺し
にした証拠は。平太様もお（49ウ）お見知有ルわたしが着物。ひつたり血汐（ちしほ）に染つて有と。さし出（で）し見（み）すれは。いか様是は
生々（なま）敷血（しきのり）。きのふこなたが着（き）ていた小袖に違（ちが）イはないと。いふに吉三が。イヤそれでもお雛は。人殺しでは（ご）ざりませぬ。
イエ〜。吉三様に科（とが）はないと。命（いのち）を惜（おし）まぬ争（あそ）ひに。平太怒（いか）つて。快典はお雛が殺したにもせよ。松竹梅の巻物（まきもの）。盗
取（ぬ）つたは吉三郎さ。エ、それはお情ない。イヤサ色にほうけた心から。盗ムまいとはいはれぬ。彼（かの）神筆を習覚（なま）。湯島（ゆしま）の天
神へ松竹梅の絵馬（えま）を。奉納（ほうな）した程のお七なれば。ほしがるまい物でもない。ソ、それはあんまりなお疑（たが）ひ。大切なる一軸を。
何（なに）ンのお七に。やらぬといふ証拠が有ルか。サアそれは。（50才）サア何（なに）と、か（か）さにか、つてきめ付（つ）くれは。ハア（色）。はつ
と二人は顔見合せ。云（う）訳口を噤（つぶ）ばかりとか（す）ふ涙（なみだ）にくれにける。